

セッションC 18・9世紀ドイツの社会経済思想

—二つの新刊を通して19世紀ドイツの経済思想と現代を考える

報告者（評者）：太田仁樹（岡山大学(名誉教授)）・渡邊碩（京都大学大学院経済学研究科博士後期課程）

討論者（リプライヤー）：斎藤幸平（大阪市立大学）・原田哲史（関西学院大学）

世話人：原田哲史（関西学院大学）・大塚雄太（愛知学院大学）

今回のセッションでは、「二つの新刊を通して19世紀ドイツの経済思想と現代を考える」というテーマを設定し、2020年に刊行された、原田哲史氏の『19世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト』（ミネルヴァ書房）と斎藤幸平氏の『人新世の「資本論」』（集英社）の合評をおこなった。

第1報告（渡邊）：書評：原田哲史 [2020] 『19世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト』、ミネルヴァ書房

本報告では、原田哲史氏が2020年に刊行された『19世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト—』の書評報告を試みた。報告の冒頭で本書の内容紹介を行った。I部・II部・III部をそれぞれドイツ古典派・ロマン主義・リストの経済思想にあて、19世紀前半ドイツという共通の主題に向けたアンサンブルとして統一的に分析していく著者の行論と、現代的意義の探求への視座について、その概略を紹介した。

次に、評者が強い関心を覚えた本書の議論の特長について、2点に分けて指摘した。第1に、ドイツ古典派やロマン主義という、従来の学史・思想史研究が十分な焦点を当ててはこなかった対象に内在的に接近することで、19世紀のドイツ語圏の諸思想たるマルクスやメンガーの同時代的な位置づけについても、深い水準で議論していける基盤を構築した点である。第2に、現代的問題との関連に関する著者の積極的提言が、ドイツ経済思想の研究状況の活発化を促進し、広範な刺激を読者に与え得る点である。

最後に、当該分野に関する、今後の継続的対話への素材提示を意識しながら、本書から導出される論点を、以下の3点に分けて提起した。第1に、「19世紀前半」という時期限定を行うことの意義づけを、18世紀後半の官房学等の潮流や、19世紀後半の歴史学派の議論との関連でどのように考えるべきか？第2に、現代的問題との「媒介項」を考えるためには、19世紀における領邦国家の統治の諸問題と、21世紀における政府機能の評価の変遷とを架橋すること、すなわち、市場活動での情報や意思決定の不完全性にどのように対処するか、という点が重要ではないか？第3に、従来の経済学史・経済思想史研究では、「ドイツ」経済思想を考究する意義を後進性・後発性の諸問題への関心から論じてきたが、現代の経済・社会思想研究において「ドイツ」という枠組みを重視することの意義や姿勢とは、どのような点に求められるか？

第2報告(太田): 斎藤幸平著『大洪水の前に』と『人新世の「資本論」』によせて

斎藤の2著のマルクス理解には、決定的な差異が見られる。斎藤によれば、マルクスの思想の変化のポイントは、「共同体」論であり、その核心は「定常性」・「定常経済」である。

『人新世』図17ではマルクスの思想が3段階に分けて論じられている。第1期は、1840年代と50年代。第2期は、1860年代である。『宣言』と『資本論』の歴史認識に区別をしているが疑問である。1868年が真の分岐点となる。『大洪水』では、エコロジーの観点は初期からマルクスのなかに一貫して存在していたと見なされている。

マルクスは「ザスーリチへの手紙・草稿」において初めて「定常経済」としての共同体の再生という観点に立つことができた。「定常経済」・「定常性」という認識の獲得により、「進歩史観」の克服が可能になり、「生産力至上主義」と「ヨーロッパ中心主義」からの離脱も可能となった。

『人新世』において、初期のエコロジーが抹消されたのは、斎藤による「認識論的切断」により、1868年以前のマルクスが「進歩史観」一色だったとされたからである。だが、報告者によれば、「本来態」→「疎外態」→「回復態」という三段階の「疎外論」的歴史把握は、唯物史観とは一見すれば反撥し合うように見えるが、マルクスの思想的発展を貫く相補的な関係にある。『人新世』においては、この点がまったく見失われている。そこでは、唯物史観は「進歩史観」として「克服」の対象とされている。

マルクスの思想全体の流れを見ると、唯物史観＝「進歩史観」が「主流」の地位を占め、「疎外論」的歴史観は「傍流」に留まったように思われる。「疎外論」的構想がプロレタリアートに代わる変革主体を提示しえていたことを論証することができない限り、唯物史観の放棄は主張できないだろう。

思想史研究においては、「認識論的切断」の誘惑を断ち切って、矛盾に満ちた生きた思想の全体を捉えることこそ肝要である。

討 論

第1報告に対して原田氏は、以下のように応答した。第1に、19世紀前半のドイツ経済思想史研究は、同時期の英仏に関する思想史研究の蓄積、さらにはドイツでの研究蓄積に比して立ち遅れている。ドイツ古典派あるいはロマン主義に対する偏見も散見される。本書は「19世紀前半」の思想史的展開の意義をクローズアップするものだが、同時にその前後に位置する官房学、メーザー、ドイツ観念論、ドイツ歴史学派、カトリック社会論などの接点を示してもいる。ただし、それらに関する研究も深化を要する段階にある。第2点については、さしあたって現代の問題への架橋に重点を置いた。政府機能での下からの意思形成については、ラウの価値論を引き継ぐとともに運動を指導したアドルフ・ヴァーグナーが興味深い。第3に、市民社会・市場経済の主体形成の遅れの反面、資本主義社会における諸問題にいち早く気づいていたのが、19世紀前半のドイツの思想家たちであったと考えられる。

第2報告に対して斎藤氏は、以下のように応答した。『大洪水の前に』を踏まえて、特に

晩期マルクスの共同体研究を見直すとどういった可能性があるのか。これを探ったのが『人新世の「資本論」』であった。英米圏においては、彼の共同体研究への着目の一方で、それと並行した自然科学研究との連関が問われてこなかった。68年段階で、マウラーとフラーズの両者にマルクスが社会科学的傾向を見出すとすれば、それ以降の自然科学研究と共同体研究は密接に関連するはずであり、マルクスの思想的転換もこの時点に存在すると考えられる。ただし、現実的関心からマルクスをどう読むかを考えている著者自身による「認識論的切断」の可能性は排除できない。「断絶」の主張の論拠をより確実にしていくための作業を目下おこなっている。マルクスの定常型社会への展望と「ゴータ綱領批判」における生産力概念に関して、彼の言う「生産力」とは、「第一の生命欲求」となりうるような労働のあり方や、それに伴う諸個人の全面的な発展を包含するものであるが、それゆえに生産性という点では必然的にブレーキがかかる。晩年のマルクスにとって「ゲノッセンシャフトリッヒ」という表現は重要であり、例えば「協同的富」も「協同体的富」と読むことによって、生産性の向上に依存しない定常型社会への彼の展望とも整合するようになる。

なお、以上を受けて、第2報告者からは、「共同体」「コミュニオン」といった語の意味するところ、マルクスの用い方を明確化してほしいとの要望も寄せられた。

その他参加者からは、ヒルデブランド以来の、社会統合の危機をめぐる社会経済史認識と両著作との関連や、マルクスの使用価値論について質問があった。参加者は30名を超え、報告者、討論者を含め活発な議論が交わされた。

以上